東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2024
「はつらつと生きる　～大学は知の宝庫～」

第２回　10/8（火）13:30～15:00　報告

持続可能な未来に向けて、「包括的セクシュアリティ教育」の重要性を考える

講師　仙波恵樹（東海内科・内視鏡クリニック）於：図書館大セミナー室

＊◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆◆＊◆◆◆＊

令和６年度第２回公開講座が、10 月８日(火)に本学図書館大セミナー室で開催されました。

今回の講師であられる東海内科・内視鏡クリニック婦人科の仙波恵樹先生は、広島大学医学部をご卒業後、婦人科医として倉敷成人病センターなどで勤務され、腹腔鏡手術を多数手がけてこられました。

今回は、『持続可能な未来に向けて、「包括的セクシュアリティ教育」の重要性を考える』と題してご講演いただきました。

前半は、先生が実践されている性教育の活動についてお話しくださいました。国連が掲げた SDG s (Sustainable Development Goals)は、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指すものとして、誰ひとり取り残されることなく、人類が安定してこの地球で暮らし続けることができるように、世界のさまざまな問題を整理し、解決に向けた 17 の国際目標です。提唱された背景には人類が不平等や貧困、気候変動、感染症などこれまでなかったような多くの課題に直面したことにより、経済・社会・環境の３つの側面のバランスから目標が設定されたものであり、今回仙波先生は、我が国の身近な問題として、不登校やいじめ、自殺、虐待、ハラスメントやジェンダー不平等などを挙げられました。そのほとんどが「人権」に関わる問題であるとし、取り組むべき課題は「教育」なのではないかと考えられ、「新しい教育」として、おしつけない、おどさない、人間関係(共生)の学び、人間それぞれがもつ権利や偏見、性に対する科学的な知識をこどもも大人も共に学んでいけるような教育なのではないかとおっしゃられました。

仙波先生は人権教育の必要性について、実感を伴ったお話しをしてくださいました。医師を志す若者たちは、医師になるまで、また医師として働くようになってから、求められることに真面目に応え、日々勤勉に役割や仕事をこなしています。そんな医師の仲間である先輩や同級生たちが過労死や自殺、縦社会の職場ハラスメントなどにより、精神疾患を発症したり、リタイヤするという現実に直面されたそうです。これは極めて深刻な問題であり、現行の教育体制に従って生きていくだけでは明らかに足らず、未来に共に進んでいく人間関係を築ける人材、自分のからだ(ひとのからだ)を大切にできる人材を育てることが我が国の取り組むべき課題ではないかと考えられたそうです。

そして、先生が実際に婦人科医として実践されておられる「性教育」についてわかりやすく教えていただきました。婦人科医として出来ることは、子宮頸がんに対して高難度な手術

である広汎子宮全摘出術を施せるようになることだけではなく、予防という観点に立ち子宮頸がん自体の罹患率を減らすことがより多くの人に貢献できると考え、子宮頸がんワクチンの接種率を向上する活動をするに至られたそうです。予防法が確立しているにも関わらず、岐阜県では、未だ子宮頸がんの罹患率は増え続けています。この状況に対して、当大学の女子学生を対象に「子宮頸がんワクチンを受けませんか？」という呼びかけで無料相談会などのキャンペーンを実施されました。SNS への啓発動画や学内へのポスターを掲示、さらには学内メーリングリストを通して「ワクチン接種により 90%の予防効果が期待できる」という主旨のメッセージを発信されました。実際にはクリニックでの接種予約だけでは受診者が少なく、先生ご自身が当大学に出向き、接種また大学職員の協力を得て社会という大きな動きを作っていくことで学生自身が自ら行動変容できるように促していくための取り組みもなさっています。大学内の保健室という行き慣れた安心感のある場所での接種を実現するということで、より受診しやすく、相談しやすい環境を作り、接種率向上のための工夫をこらしています。

先生は、医療者側のテーマとして、1.科学的根拠に基づいた正しい知識を伝えること、2.生徒(学生)に自分の意思で接種するかどうか、選んでもらうことを挙げ、知識不足による拒絶を減らしたいという意見を述べられました。おしつけない、おどさない、淡々と事実を述べ、自身で考えてもらうということが大事だとし、医療者はあくまでも科学的に正しい知識を正確に教えることが目的であり、ワクチン接種を強要するものではないとおっしゃられていました。

後半は、国際セクシュアリティ教育ガイダンスの概要、性教育をはじめてみませんか？という内容でお話しくださいました。

セクシュアリティとは、性のあり方をさす言葉で、人それぞれが個々にもつアイデンティティを意味し、＝ＳＥＸ（性交）のことではなく、思いやり、愛情、友情、ジェンダー、包容力といった人間関係における社会的、心理的側面も含んだ概念とのことでした。包括的セクシュアリティ教育は、いのち、からだ、健康、価値観、人間関係を学ぶ学問であり、性のあり方を学ぶということは、自分らしく生きること、ひいては自己肯定感につながるものだと述べられました。

包括的セクシュアリティ教育には、背景に 1980 年後半のＨＩＶ/ＡＩＤｓの世界的流行があり、性感染症や性をテーマにした教育がすすめられ、90 年代には、各分野の専門家と研究者を集めて性教育プログラムの作成により包括的セクシュアリティ教育ガイダンスが完成しました。ガイダンスの目的は、乳幼児期から思春期、成人期、高齢期まですべての人が、性的発達と人生の歩みにおけるあらゆる局面に対して、懸命な選択と対応をすることができ、自らと他者の尊厳を大切にできる知識・態度・スキルを育むこと、人間関係において様々な共生能力を獲得し、喜びを共有できる能力を獲得することだとされます。若者が科学的根拠に基づいた正しい知識を持つことは、自らのからだを自らが守り大切にするだけでなく、他者を認め尊重することができるという人間関係の共生につながっていくという考えのもと、子どもの年齢・成長に即したキーアイデアが設けられていました。8 つのキーコ

ンセプトは、1.人間関係、2.価値観、人権、文化、セクシュアリティ、3.ジェンダーの理解、4.暴力と安全確保、5.健康とウェルビーイング、6.人間のからだと発達、7.セクシュアリティと性的行動、8.性と生殖に関する健康があり、本講義では 7.8.についてお話しされました。

ＳＲＨＲ(sexual and reproductive health and rights)には、性や生殖など自分のからだに関するすべてのことは当事者である女性が選択し、自己決定できる権利のことと定義されます。さらにＳＲＨＲはＩＰＰＦ(国際家族計画連盟)より、単に病気、機能障害、虚弱ではない状態を意味するものではなく、身体的、感情、精神、社会的な幸福がセクシュアリティと生殖のすべての局面で実現できていることと新しく定義されています。例として、アフリカのある国では 13 歳になったら決められた相手と結婚し、若くして子を産まなければならない風習があり、いずれも選ぶ権利が保障されていないことを話されました。また性行動に関しては、５～８歳では他者と親しい関係になることは、人として自然なこと、他者にふれたり親密になったりすることで愛情をしめすことができるということ、よいタッチ(友人と手をつなぐなど)と悪いタッチ(見知らぬ人にさわられるなど)があることを理解すべきだとされます。また、妊娠は自然な生物学的プロセスであること、よって現代的避妊法は避妊や妊娠を助けるものであり、12～15 歳では、性行動に関する迷信(アダルトビデオやインターネットなどからの誤情報)が流布していることを知ることが重要であるといわれます。15～18 歳では意図しない妊娠やＨＩＶを含む性感染症を防ぐため、リスクを低減する方法を優先的に考えることが求められ、避妊具の使用で妊娠の計画を助けることができ、それが個人と社会いずれもメリットがあるものだとしています。

先生は、婦人科医のお立場から、避妊の選択として低用量ピルを勧めておられます。それは女性主体で避妊ができ、きちんと服用することで望まない妊娠を阻止できるからということです。

15～18 歳では意図しない妊娠は性的パートナー両方に責任があることが記されており、中絶に関する一般的な手術法だけでなく、2023 年 5 月から経口妊娠中絶薬が認証され、入院は要するが麻酔不要で中絶が可能になったとのことで、手術による痛みや子宮内膜の損傷や感染リスクが軽減するメリットがあるというご説明でした。さらに、様々な性感染症に関して増加傾向にあるものもあり、コンドームの正しい使用による淋菌・クラミジアの予防効果は 98%であるとのことで、正しい使用方法を教えてくださいました。ＨＩＶ感染症は、日本では減少傾向にありますが、世界的には増加傾向だそうです。ＨＩＶ感染症に関して、未だ感染ルートに対してゲイに特有の病気だという偏見、不治の病であるといった誤った認識、社会的スティグマが根強く残っているようです。しかし、実際は治療の進歩により、適切な治療を受けた感染者の長期予後は非感染者に近づいてきているそうです。ＨＩＶの検査は保健所等で、匿名で受けられますし、精査や治療が受けられる拠点病院については各自が知っておくべきだと話されていました。また、暴露前に予防内服ができる薬も未承認ながら開発されており、高い予防効果が認められているようです。

最後に性教育をはじめてみませんかというお話をしてくださいました。正しい知識はリ

スクから回避することができ、自分らしく生きることにつながるものだという観点です。自分の子に教えるとき、実践には科学的に性（セクシュアリティ）を教えるというスタンスで、最初は実感を伴う「からだ」のことを教えていくことから始められてはどうかというご提案でした。子ども自身が、からだは「恥ずかしいもの」ではなく、「大切なもの」だと理解することで、自分のからだに対してポジティブになり、ひいては自己肯定感が生まれると言われます。からだについて恥ずかしいことや、いやらしいことといって避けたり、逃げたりすることは、からだについてタブー意識を持ち、自身の「からだ」に対する偏見につながるのではないかということです。

先生ご自身が、第２子のお子様がお生まれになった際に、当時６歳の娘さんからの「赤ちゃんってどうしてできるの？」という質問に対して、詳しく説明できなかったという反省を生かされ、その後、からだについて娘さんに詳しく説明をする機会をつくられたそうです。先生は、こどもへの性教育で気をつけることとして３つご提案くださいました。①淡々と（科学的に）事実を述べる、②価値観を押し付けない、③小学校高学年以上は同性の親が教えるということです。例えば、幼児期の性器さわりを取り上げられ、ダメよ（タブー感）とか、汚いからやめて（価値観の押し付け）ではなく、「大事なところだから、手をきれいにして触ってね」「不快に感じる人もいるから人前ではしないように」といった肯定的な言い方や、子どもにわかるような説明の仕方をすることで、性の捉え方が変わってくるのだということでした。子とともに親も一緒に勉強していく（準備しておく）ための時間が大切だということが、とてもよく理解できました。

講演後には、会場から多くの感想や質問がありました。実際に実践された性教育について、お孫さんに対してできること、小さな頃から誤った情報をＳＮＳや友人などから得られる時代で、どのように対応していけばよいかなど、是非聞いておきたい内容のご質問ばかりで、性に関する教育は、非常に関心の高いテーマ、内容であったということを窺い知ることができました。

【講座の様子】